

なみえやきそばたいこく
浪江焼麺太国（福島県浪江町）

「まちおこし」から 「まちのこし」へ

なみえやきそばたいこく
浪江焼麺太国

代表
やしま さだゆき
八島 貞之



1. 浪江町の概要

福島県浪江町（なみえまち）は、福島県最東端に位置し、東は太平洋、西は阿武隈高地、高瀬川、請戸川といった海・山・川を有する、人口約21,000人の自然豊かな町です。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災では、津波により182名の方が犠牲となり、また町中心部からおよそ10キロメートルの距離にある東京電力福島第一原子力発電所の事故に伴い、町全域に避難指示が発令され、現在でも全町民が町外での避難生活を余儀なくされています。

平成25年4月には避難指示区域の再編が行われ、一部の地域では日中の立入りが原則自由になりましたが、放射性物質の除染やインフラの復旧は進んでおらず、町に帰還できる状態にはなっていません。

町では、平成29年3月を避難指示解除の想定として復旧事業を進めておりますが、避難生活の長期化に伴い人口が約19,000人まで急激に減少しているなかで、町民一人ひとりの暮らしの再建、ふるさとの再生が急務となっています。



避難により人影のなくなった町内

2. 活動開始の背景・経緯

素晴らしいふるさとを先代から受け継いだ私達でしたが、世界的不況に直面し、自らの稼業、そしてふるさとを後世に引き継ぐことに対し大きな不安と悩みを抱えていました。そのような中、同世代の仲間と共に自分たちに何ができるかを模索したところ、地域活性化に向けた地域ブランドの確立が必要ではないかとの結論に至ったのです。

平成23年度、浪江町に常磐自動車道の浪江インターチェンジが開通予定

となっていたことに伴い、交流人口の拡大はもとより、高速交通網整備による都市部への人口流失（いわゆるストロー現象）を起こさないことが喫緊の課題となっていました。また、全国の例に漏れず、近隣自治体でも郊外への大型店の出店により、中心市街地（商店街）に誘客を図ることが難しくなっていたほか、商工業者の後継者が町外に流出するなど抱える問題は数多くありました。

自然豊かな町内には、個々には素晴らしい観光資源が点在していましたが、多くの観光客が訪れていたとは言えない状況がありました。そのような中、浪江町商工会青年部の約30人が中心となり、約60年前から町内で親しまれてきた極太麺の焼そばを「なみえ焼そば」と名付け、「ご当地グルメによるまちおこし」として平成20年11月、「浪江焼麺太国」を“建国”し、町内に訪れる観光客増を目指して県内外でのPR活動を開始しました。



ご当地グルメ「なみえ焼そば」

3. 建国前の取り組み

浪江町商工会青年部では、ご当地グルメでまちおこしの祭典！B-1グランプリの主催団体である「ご当地グルメでまちおこし団体連絡協議会」（通称・愛Bリーグ）に加盟すべく、「富士宮やきそば」でまちおこしに成功していた「富士宮やきそば学会」（静岡県富士宮市）、第3回B-1グランプリ in 久留米（福岡県久留米市）への先進地視察などを行いました。

設立の準備として、組織のコンセプトを「焼そばの国」に見立てること、強烈なキャラクター登場によるカリスマ性の演出などを考え出し、代表を太麺の国の象徴である「太王」（だいおう）と名付けました。活動するメンバーを麺バーと呼び、実働部隊のトップを「麺

閣総理大臣」（めんかくそうりだいじん）、事務局を「麺房長官」（めんぼうちょうかん）、焼き担当を「労働大臣」（ろうどうだいじん）などと命名し、楽しさを全面に押し出すことを決めました。



“建国”を宣言

4. 建国後の取り組み

平成20年11月、浪江町最大の伝統行事「十日市祭」のステージにて、太王が建国を宣言し活動がスタートしました。浪江焼麺太国が国家戦略の一つとして掲げた「マスコミを使った効果的なPR（CMではなく取材）」が功を奏し、地元の新聞、テレビで連日のように「浪江町の謎の国が出現」「まちおこし団体が登場」などと取り上げられるようになり、ご当地グルメブームの波にも乗り、福島県内の「ご当地グルメでまちおこし」トップランナーとして知名度が上がってきました。

翌21年には愛Bリーグに加盟（支部加盟）し、第4回B-1グランプリ in 横手のエキシビジョンに出展。22年には念願の本部加盟となり、第5回厚木大会で初出展を果たし、ますます注目されるようになりました。同年11月には町内で主催イベント「東北4大やきそばサミット in なみえ」を開催し、2日間で3万人を超える集客を記録しました。

町内の飲食店から理解も得て、なみえ焼そばを提供する皿に国の伝統的工芸品に指定されている「大塚相馬焼」を利用するなど、地域資源、他団体との連携も図りながら活動を展開し、「なみえ焼そば」をターゲットにした観光客が訪れ始めました。



東北4大やきそばサミット in なみえ

5. 東日本大震災、福島第一原発事故による避難生活と活動再開・継続

前述、東北4大やきそばサミット in なみえの成功など、活動の成果が出始めた矢先、平成23年3月11日に東日本大震災が発生しました。翌12日からの原発事故により、すべての浪江町民は避難生活を余儀なくされることとなります。麺バーも全国各地にバラバラとなりました。

学校や公共施設の体育館などで避難生活を送る中、麺バーそれぞれが受けた温かい支援に「まちおこしに取り組んできた自分たちだからこそ、何かができるはず」との思いを強くし、活動再開を決意しました。震災から約1カ月後の4月17日には福島県二本松市で開催されたイベントに麺バーが集まり、何とか用意した300食分の「なみえ焼そば」を振る舞いました。友人、知人、近所の人たちの安否がすべて確認できない時期でしたが、情報を聞きつけて集まった町民たちが抱き合っただけで再会を喜び合っていました。その姿を見て、今はまだ町に戻れないが、「町民の心の復興」を目指し再スタートしました。



平成23年4月に活動を再開

6. 再びB-1グランプリへ

「町民の心の復興」を掲げ活動を再開しましたが、活動拠点がなく我々にとってイベント出展のために集まることすら困難でした。しかし、同じまちおこしに取り組む全国の愛Bリーグの仲間たちから物心両面にわたる支援、協力をいただき、各地のイベントで、避難している町民になみえ焼そばを届ける機会ができました。ここでも多くの人が再会する場となり、我々自身も

楽しみが増えることとなりました。

B-1グランプリに向けては、東京の大学、団体などからもボランティアでお手伝いいただき、麺バー不足も解消して臨むこととなった平成23年11月の第6回姫路大会（兵庫県姫路市）で4位、翌年10月の第7北九州大会（福岡県北九州市）でも4位に入賞するなど、浪江焼麺太国が町のために取り組んでいる活動に理解が深まったと実感し、価値のある結果を残せたと麺バー一同が喜びを分かち合いました。

7. 「まちおこし」から「まちのこし」へ

震災から3年目となる平成25年は、人々の記憶も風化し始めていることを感じる機会が多くなりました。イベントでも「まだ戻ってないの?」「その後のことは知らない」との声を聞くようになり、町民も長期化する避難生活に疲れ果て帰還を諦めかけている状況となりました。

そこで、いつの日か町に戻る日が来るまで、「どこにいても浪江町民としての誇りを持ち続け、心の中でも浪江を感じ続けられる」よう、「まちおこし」から「まちのこし」へ、をキャッチフレーズに活動し、浪江町の現状を強く発信しました。さまざまな事情から避難先に住民票を移動する町民が増加傾向にあることを憂い、なみえ焼そばに一味唐辛子をかけて食べることに由来した「君も一味だ」作戦として、浪江焼麺太国の救世主キャラクター「スパイスマン」が誕生するなど、辛いことばかりで忘れかけていた楽しささえも思い出さきっかけとなりました。

その結果、9月の2013北海道・東北B-1グランプリ in 十和田（青森県十和田市）、11月の第8回B-1グランプリ in 豊川では念願のゴールドグランプリを受賞。頑張っただけで活動を継続してきた中で、最高の瞬間となりました。



ゴールドグランプリ受賞

8. B-1グランプリの誘致

平成26年10月18日、19日、福島県郡山市で第9回B-1グランプリ in 郡山を開催しました。本来であれ

ば愛Bリーグ加盟団体の所在自治体でしか開催できないのですが、郡山市、浪江町をはじめ愛Bリーグ、全国の加盟団体の協力により実現することとなりました。大会はB-1グランプリ史上初めて「東北・福島応援特別大会」と銘打ったサブタイトルを設け、浪江焼麺太国がホスト団体として「ふくしまエコ(eco)ひいき」活動を展開し、福島県産農産物の風評被害払拭、東北・福島への元気発信に努めました。具体的には、郡山市内で稲作に取り組んだほか、出展団体が使用する野菜、肉は福島県産の使用を推奨しました。福島県内のイベントで過去最大規模となる45万3000人が来場し、大成功を収める結果となりました。

9. 課題と展望

浪江町は平成26年11月現在も全町避難を継続しています。「おこす」町には戻れない状況は変わらず、麺バーも避難先での仕事、家庭、生活リズムが落ち着きつつあり、従来通り頻繁な活動への参加が困難にな

りはじめています。参加できる麺バーも固定化され、義務感が強くなっていることによる活動の停滞が危惧されます。そこで、浪江焼麺太国は麺バーのみならず、活動趣旨に賛同していただける町民らのサポーターと手を携え、まさに「町ぐるみ」とも言える100人規模の活動に発展させています。今後も復興のシンボルとして、活動を継続させていきます。

また、「なみえ焼そば」によるまちおこしの結果、模倣品対策が重要となってきています。浪江町、福島県とは無関係の事業者が「浪江町」「復興」を語り販売していることに心を痛めている町民も多いのです。我々は「なみえ焼そば」を町民共有の地域ブランド、財産と捉え、「麺定制度」（認定制度）を創設し、活動理念や調理法など理解してもらった研修を経た飲食店（店舗営業）のみに“本物”の提供をお願いします。愛Bリーグと日本弁理士会による「地域ブランド監理・監視機構」の立ち上げにも関わり、「ご当地グルメ」のブランド力向上にも寄与しています。

ゴールの見えない不安な避難生活が続く中、少しでも明るい話題を提供し、前向きな姿勢を見せながら活動を継続させることが、これまで出会ったすべての方への恩返しにつながると信じています。